



枝葉拾葉集

改正

二一の巻

伊地知文庫
文庫20
361
7



文庫20
361
7

伊地知氏書冊

扶桑拾葉集卷第二十九

目錄

夫木和歌抄跋

作者可考

風葉集序

同

新濱木綿和歌集序

同

水無瀨殿歌合跋

同

舞御覽記

同

等持院八講記

同

陽祿門院三十三回忌記

同

能勢文庫

小山院御入内記

同

杖素拾葉集卷才二十九

史本和歌鈔跋

作者可考

此史本和歌鈔ハ藤原朝臣長清自撰ナリシ中
 ありの哥他乃家集よりいへり代、勅撰より和
 哥をいへりむありしをいへり自今以後乃勅撰
 のより又いへりありしをいへり人のきき又世に
 あさよりいへりしをいへりありしをいへり又史本
 抄とありあり今素よりいへり抄の名紙思案
 てかゆありしをいへりありしをいへり白衣の老翁
 人よりいへりいへりありしをいへり和歌抄ハ我朝より



新演本綿和歌集序

新演本綿和歌集序

同

わ梅とらうらあめつちひらきせしむるもさうまわて
神代のことまことそなわやせらるるまは代に此勅
撰を神と此御名かなくあはれをまはらうら
あはれとまゆれ御神のみちとなくとゆきと
うらうら佛の御名ととまよ入給ひしむるまのまの
くもかきしむるもと葉をひらたまはらうらまのま
もをまはらうらやのこまはらうらうらまのま
あはれつらうら兼保のこまあはれまのまの集
とらあをれいしむるもまのまの集あはれつらうら

水戸瀨殿秋合歌

同

志はのほろなきうらも一た志葉の戸よけいあへ
れくあふのあやめおちいしほ行くも雲もあは
ゆるやいも夏くくもゆるきもいやにのま
事の外身くくはあふちくくくも
しり中りくくくもやあうくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
ほくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
のくくくくくくくくくくくくくくくくく

御所ららぬりあつたにちりて仁尊光院の八重梅
のーふりくくしの高あり廣庭に御座とて
西苑と御親王の園に殿はものこまかりせ給記の
下よかりいとのそみとて上は給記の
とそ乃もよと園をてふて殿上人さうゆり
御抱ありし柳子西の地記つ付方春の枝を又苗原中
細言き孝重胡臣比と入ら蒙中の筆は巴ありと
くく人ららぬりあつたにちりて仁尊光院の八重梅
のーふりくくしの高あり廣庭に御座とて
西苑と御親王の園に殿はものこまかりせ給記の
下よかりいとのそみとて上は給記の
とそ乃もよと園をてふて殿上人さうゆり
御抱ありし柳子西の地記つ付方春の枝を又苗原中
細言き孝重胡臣比と入ら蒙中の筆は巴ありと

をさかやえしりうののこまかりせ給記の
御所ららぬりあつたにちりて仁尊光院の八重梅
のーふりくくしの高あり廣庭に御座とて
西苑と御親王の園に殿はものこまかりせ給記の
下よかりいとのそみとて上は給記の
とそ乃もよと園をてふて殿上人さうゆり
御抱ありし柳子西の地記つ付方春の枝を又苗原中
細言き孝重胡臣比と入ら蒙中の筆は巴ありと

て縁をなほり家

うつむしちこまぢれ
神のまゝ紅のまじり

小正月れ東じこのおん

— 女房の作同しやしらこもなるまきまけなまらうてらひ
まじりふこまじりぬ— 女房まらうまらうて歸人
よまぬ舞の程山入葉— やう— こゆひひまき
のゆきまらうまらうてらひ— まらうてぬまらう南殿
の山あ— こま還歸るま

九りまらう何本れ山あ— こまらう— 山あ— こまらう
まらうてあ— こまらう— こまらう— こまらう
— けらの佛方中まの佛— こま女房— こまあ—
のまらう— こま相中おま— こまらう— こまらう— 殿
— こまらう— こまあ— こまらう— こま二階の山あ— こま院中ま

二階— こまらう— こまらう— こまらう— けら佛方— こまらう—
まらう— こまらう— けら佛方— こまらう— こまらう—
おまらう— こまらう— けら佛方— こまらう— こまらう—
まらう— こまらう— けら佛方—

等持院八講記

同

新樹風静ふして卯花彫るゝまひししこ語るはま
な甲なれの郭公はまのふるゝ志好しねをまゝ傳ふ
しつゆりてあま修りえしつゝくらゝやれねを
よやまゝいひつゝやうしつゝ靈傳靈社とて語て傳
りもあまは明徳神のゝ卯月廿日あまのしつゝ
やれよまれりやう狂や傳りしつゝ詠哉仁和寺醜醜勸
徳寺れ行りしつゝ見國の景頭あやしのまゝ
津よよいゝあまの一條二條のあまのしつゝ
ら布を引きりしつゝ志あまは乞ひつゝ御傳

事少く海も大らんとすふおぼるる事
きくはるく新来の人よじつひけうと此空より
はのゆりゝゝある人のしやうらんを等持院に
十二廻の遠忌とこの晦日をむくむくせ給と此
をいふ頭密の外もてあゝと此の由佛事とて候
せしれらる申ふと御八福としよとせよ給て四
大寺のせよまよとせればはらりの長元例りま
うせしとてまよとせし始りせしれゆしかの院
大業院傍にくゝらと給ふるは嚴儀のてい
りゝゝたゝらりしてゆきゝゝのまひ證義人
乃例をゆらと講徒各別ふとて土口を此外と

同者ゆりゝゝの證義者興福寺ゝゝ寺勢大傍正寺勢前
別當傍正同寺權別當法下權大傍初長懷山門ゝゝ法下
權大傍初良壽寺門ゝゝ法下權大傍初房淳とて講
師東大寺にゝ權大傍初義實興福寺ゝゝ大傍初長
雅權大傍初實惠延曆寺ゝゝ法下權大傍初心兼權大
傍初心尊權大傍初毅俊とて輕衆東大寺ゝゝ寺玄房初
真福寺ゝゝ隆俊實雅兼覺圓範元曉孝俊とれ凡そ
得業るり山ゝゝ權大傍初良恭權大傍初忠慶法眼實
圓權律師毅隆權律師幸圓寺ゝゝ内供奉頼深房
祇小少てゆりゝゝやゝゝゝ教隆幸急寺玄住侶
るり惣して廿六人の人々我々一寺の名通よわ

市乃... 牛飼... 前駐侍... 大童子... 振... 竹... 乃袖... 大乗院... 院信正... 前乃... 沈乃... 門の人... 門の内... 前乃... 門の内... 庭上... 乃門内...

沈乃... 門の人... 門の内... 前乃... 門の内... 庭上... 乃門内...

しらをそまつしあふ番匠八人森府長お前行して
東寺をくくす叙しきくしてあゆし人を多
まふ仲氣文の明方志む花堂山端いけつ月を
くやとあてやうしそんせこまふそ大申納を
を始してくくす路指しきまふ後富山の監
父子三人同じつもの装束をれえひとお小袴は
まあまをくくして右刀とんきくれ物ちまらて
四人のわのこまを内力らく丸右はあゆしきまら
まこくくはまにまのぬらふかくこまをか
ゆき神巻の役重光朝臣これとほしきく聞白
いふてまお相回寺のまふくまらしてくこれ刻

限はこれと門より入るこまお神の巻をこれく
ゆきまをみえはせぬまら神隨かぬ人いつま
まをたまはまらく志まらまらゆきまらまら寺
中よりまらりく前乃髪まらゆきまらまら
警言譯の魔縁降伏乃可くまらまら賢人れ大后
のまら声まら百鬼垂れまらまらまらまら退
散しゆきまらまらまらまらまらまらまら
まらまらまらまら前駈三人後鍾氏經知量木まら
上人ゆきまら色まらまらまらまらまらまら
まら乃庭まら季甲胡長資忠朝臣木まらまら以外親忠
朝臣を始して神休所まら木倉乃人まらまらまら

御水乃俊季甲御后なりやう西の御座の廂より
みまゝくして总座ありし及主人東に日ありし
よりすまゝいゝ開白の由りて踏居るこまゝいゝ
後总座ありし以後詰りていゝを总座とすま
洞院大納言万里小路大納言日野大納言勘解由小路大
納言日野中納言中山中納言兼室中納言裏辻子
中納言三条宰相中納言十一人也其後左右侍人
樂屋をいゝ庭上より立りて乱整と奏し侍り
しあまの集會所よりいゝ證義又人堂前の庭
上よりいゝ西の南階よりいゝ入居場志願のち講聽
りていゝ入居場よりいゝ後奉行并一座の證義の

由りていゝ註記ありしをいゝ侍りていゝやう
威儀師いゝて天台の證義よりいゝ西の註記
法相よりいゝ二位得業光曉天台よりいゝ内大臣信朝忠度
よりいゝ侍りていゝあまの証と柳管よりいゝ紙を
よりいゝ六位二人よりいゝ役をいゝ東西の大床高欄
のよりいゝといゝと接ぐ堂童子の座よりいゝ同等持
寺乃御八講よりいゝ諸大丈け役をいゝ免侍りていゝと
けいゝいゝ及上人よりいゝたよ知兼長方右長をいゝと
よりいゝゆきと後師よりいゝ東院信正同若大納言得業
實雅よりいゝおんよりいゝ今乃後師よりいゝ法相三量乃秘蹟と
よりいゝいゝ時識五童の奥をいゝとすまゝいゝとすまゝいゝ

これ尋ねたり及りてちとく白紙とすま
ていふ所なりとありこの葉とありてゆへに
くゆふはく鳥口の御教文とすき物なり已傳乃後
りや志うあましこのまじい威儀昨これと法と夫
ゆへにさく法通經のけりい満親朝長とす出堂乃後
西の廊より園座よりまけしは座よりゆへに三条
相申お祓をけいふまふやそて正面の庭上りて祓を
まゝふとすき志うして祓ありして説經して
つて備後よりまけしはやそてまてまて目ざけ
るゆへにやそてゆへにまじい信佐退出の松明ひりも
まゝして晴く空の星はまゝ出て廿二日ハ初日

せ給ハ次ハ三日也賀哉乃系りよとてさくまは是こ
れ先叙してゆへにや又冒よりまじいを給着坐りハ主
人洞院大納言万里小路大納言日野大納言勘解由小路
大納言日野中納言左衛門督兼室中納言九條宰相九
人してまゝ一戸次よりやそて堂童子ハ初日此とくにて
ゆへにまじい大乗院信正御遠例とくやそて出さ給く
次して廿二日ハ又巻日るまじいむねを賞せしは
園白丸四事ハ一よとすい次右大臣左大臣別当を
の出仕をまじいまじいこととありまじい知花とくこれ
名強とやとすまじい堂とくこととありまじい村とくちと
ゆへに六年刻くまじいまじいまじい神とく息兼教朝臣

宗量朝臣

教真朝臣

滿親朝臣

實清朝臣

資忠朝臣

知季朝臣

経良朝臣

資國 兼宣

知兼 業後

長遠 長方

知高 資家

経豊 嗣忠

重房 為右

嗣保 定清

實次等三十七人

入道場乃後一座の禮義
集會ありいゝとせりやうく勤とせ
如く右伶人喜承とて一突婁とて前
一侍志あり威儀散花師の事とて
列とて南階より下りて藪の形ありて
勺とて基菩薩乃即奇とてありて

或記し六光明皇宮に侍奇とてやとて著座乃云つ西階
とてりやうとて列立とて一侍とて藪とて
水桶六位苑人三人永後長頼知長とて
前並あり山鳩とて先とて内侍捧物家房朝臣
これを持次と院御捧物知補とてこれとて
女院御指物親忠朝臣とてこれとて院
司とこれとて次法門親王と後上人これとて
主人開白以下の侍とて自捧物とて
五位法女とこれとて女房達四位五位
客これとて次殿上人乃自捧物下家司
これとて物次とて上達部との指物とて
法女九人これとて

抑く殿上人れ末より修るべき竹り次官外記師連物
に兼治宿祿光夏師豊師胤中原重貞因昨野不自
持物をもとちゆりて九条大納言のまへに列立きて
くちつきてとせもふり乃外れ上進すくちの棹のふと
取のまへに文永の例にてゆりやうくとりしをさへ
とれとてあはれりや装束ととりさるるまへにまれば
とまこひは卯月よりうぶらうの友又月よりま
くちと水のつらりありとほはれくちにおりぬ
らまはしりやとて一はほはれくちよ凡格とゆり
まらふ合紙の持とのまもとちて新なるせはあま

末常乃まもとてと果ふくやまわたりはまをまはれ
に秋の紅葉とゆりくちくちくちくちくちくちくちくち
既ちこ堂のゆりゆりを伴つ堂上堂下ひまもとちく
ゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬ
のまもとてこれいかにまもとてこれいかにまもとて
ひ蘭蕙のあまもとてくちくちくちくちくちくちくち
ゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬ
斬るのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬ
かやゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬ
ゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬのゆりまぬ
とちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくちくち

供養あり御厚味ハ又房淳法宗ニレテ河々あり
して仙洞より寶樓閣經り橋の折枝より多しこれと
しせめてまふ此法よりむせより又大なる
よりハ金剛經指殿よりハ壽量品かやうよくや
のゆゑことゆりて東乃調子ハ盤渉調より宗明
採采老萬秋樂序同破六帖續合三帖同破急輪臺青海
波秋風樂千秋樂竹林樂より少くゆりて堂上ハ
等より主人山科前中納言宗量朝臣良朝臣地下
ハ圓秋藤秋守秋氏秋量秋等也篳篥ハ兼邦朝
臣季村季英の笛よりハ大炊御門前大納言中山左衛門
尉平定前宰相信俊朝臣景房景秀琵琶より今出川内府

圓中納言第一ハ四辻中納言實清朝臣實信等なり
此外藤中一張増位房よりしてゆりて朝敵ハ景継太鼓ハ定
秋よりゆりてや惣して堂上ハ一人地下ハ一人なり
てハ著衣よりハ万里小路大納言日野大納言由小路大
納言日野中納言日野宰相等なりハ皆装束一振
ら似て衣冠おして中ハ與ありゆりてハ朝敵
院のありてやゆりて一人重衣よりハ一人重衣よりハ
よりハ琵琶れよりハ第一の松凡よりハ木多し
よりハ通いよりハけの音御法の聲ハ通いよりハ
よりハ竹まハまよりハ簫笛琴堂篳篥琵琶鏡銅鉢の金
言いよりハふりてゆりて説經もよりハ主

清和長知孝初は資忠朝臣業俊長方嗣保録を為右定
清資次等よりして三十六人よりくゆらやまよ言人
よりり臣衣と名なりよりりはこのむとよいさ
よりり堂疾嚴れむよりりこれハ危の情是道中
よりりしてよりりハ嚴きよりり此よりり後傍の別あ
よりりよりりハ危きよりり此よりり大阿闍梨上系院
よりり大文玄崇三歳の仲装袋を忌よりりよりり腰輿よりり
よりりよりりハ駕輿丁よりり此よりりよりりよりり
博門の前よりりしてよりりよりりハ危きよりり三十日危の後よりり
くきよりりよりりしてよりり見よりり此よりり博童執蓋執録木
よりりよりりしてよりりハ秘密甚深のすよりりよりりよりり
よりり

よりり度者此誦經ホレ河よりりハありよりり走戒誦經守
師ホレよりりよりりハ人阿闍梨の佛布施をよりり
よりり大文玄崇よりりよりりこれよりりよりり灌頂言人
よりりよりりよりりハ佛堂中堂外のよりりよりり
よりりよりりハ相よりりよりり明よりりよりりよりり
よりりハ秘密法系座よりり佛佛よりり寸若天魔の障導るく
よりりよりり真言上系の座よりりして結乾れよりりよりり
よりり尊具をよりりよりり大文玄崇よりりハもとむよりり佛果増
進志よりりよりりよりりよりり佛流もよりりよりり
収のよりりよりりよりりよりり此よりり寺ハ山よりりよりり
よりり佛三拾三年の事秘書切利天よりりして摩那乃

陽祿門院三十三回忌の記

同

いし善撰。とみきふ都のあつこくあつとて
て年月をたつとゆふおあつとてとてとて
ありて胡の病とてとてとてとてとてとて
有伏見の里とてとてとてとてとてとてとて
紫舟とてとてとてとてとてとてとてとて
可六とてとてとてとてとてとてとてとて
の法前此あつとてとてとてとてとてとて
まきとてとてとてとてとてとてとてとて
いし善撰とてとてとてとてとてとてとて
故陽祿門院三十三回忌の記

さしせふるるくとしるの松れ陰をあゆむせはあ
さきのふけーまよ心神うちわくくせふふあを氷と
いこくくかやゆー又まれば方出興して寺か
せはふやうて一切経の精進の事あすくをいふく
くんの右れ方よはまきふ流むくせは准后同出
身あすは政殿の内へ上指して慶申し禮儀をさ
しーすれーも心忘身あすて結縁しきふ
いさう頻ふすれゆーふくれを産ははるさふ
國師のト又山十刹諸山の修進四百人今も是れに列
せしめてさしれり又可後の修進すいして御経れ
くこと一はとりりて院の上准后いさう方

まいもは政殿を別初とかないさま
すはまは掃ゆまらやまらちち路いすー足國師
才一乃くことりてあゆまふや業人衆人一を
いらーとうちてさたよりあすおしーあくせし
くはらふ松の御あもくはくは海もく海もく
ゆー松風いひまあして物の言もあすいさ
まやまむくさくさく身もくしんらそー物ー出
経いられ佛殿のまきひやう家一切経のくは教百合
るれく時とーいしゆーやらんそ慶院仏殿(出幸あ
すは政放准后とゆー出指しまきすいせは右
の廻廊とこれーまきしん物さるんを海

也然していふにみるたのちこれ様ありて一國師以下
の傍よりちこころいひ給きふ一簾中の御所作にて親
王も准后も大ゆりて点忌彦もあふまゝに記してあり
に物いさゝらして一難治のうへ准后もなれゆりて
さて又親王もいひて一簾中よりいさゝらして行幸記を
ふさぐよふに記しつゝまらふ親王の右方准后のたの方
へけつせ給このうへ又一簾中よりいさゝらして院を
出候ありて揚政殿へいさゝらゆりて一や殿中これ儀
或る事なりとて相いふ人目とあはらうゆり
元亨これいさゝら後醍醐院西園寺へいさゝらあはして中
務親王二条の大教人と作りて給ふゆりていさゝら

秘曲の所作ありて一これを以乃ありて記をいさゝら
ゆりて後いさゝら殿中これ所作いさゝら給りゆり
ぬりて記人よりいさゝらいさゝら記をいさゝら
まらゆりて所作人よりいさゝらいさゝら記をいさゝら
階下よりいさゝらぬ園乱退宿治のいさゝら親王も准后も
内よりいさゝら行幸海波の時よりいさゝら准后簾中より
いさゝら親王もいさゝら院へいさゝら簾中よりいさゝら作あり
揚政殿へいさゝらいさゝら内よりいさゝらいさゝら簾中よりいさゝら作あり
いさゝら女房これ所作の人よりいさゝら二条局新吉兼房よりいさゝら
いさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝら
いさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝらいさゝら

傍をいふ系をよみし節ももて延して夕日をゆき
事の時やこれをもゆき死をゆるるる

丸

圓乱旋 青海波 採桑老 太平樂 陵王

右

退宿徳 白濱 新鞋鞆 拍鉦 納履利

半

准后 大官前宰相 經良 圓秋 英秋 房秋

豐原友秋 同守秋 同氏秋 同量秋

算策

兼邦朝臣 安倍季村 同季英

笛

三條一位 大炊御門新大納言 四辻前宰相 位後朝臣

京徒 京永 大神系房 同景秀

琵琶

今出河前内大臣 今出河大納言 新共兼總局

琴

^{不系}四辻中納言 二条局

舞人

丸

近菜 俊葛 重葛 正葛 朝春 元葛

右

尸舎より仰つては、園白又、この事、下を
行儀事先、出く、この事、下を
官外託、人、女院乃、出、下、院
司、殿上人、あり、院司のあり、
執事、を、院司のあり、
お、あ、院司のあり、
院司のあり、
下、あり、
の、あり、

く、
あり、
て、
く、
これ、
の、
か、
よ、
あ、
ち、

わしやまれば

らるれば

サ御

あり、ぬの朝

双す

内あきれば

三條す

まふりれば

ふ紀の

時るれば

くれば

ときるれば

前ま

ことたの

りく

ゆさるれば

二条す

ときあいの

月

南さるれば

おの

えむてれば

随少三人とねり二人ぬ木一人小雑色三人

とねり二人志より一人こさく一人こさく一人

とねり二人志より二人雑色四人

随少四人小とねり二人志より一人こさく一人

とねり二人雑色四人

随少四人とねり二人志より一人おさく一人

とねり二人志より一人ゆき一人

随少三人とねり二人ゆき一人

随少三人とねり一人ゆき一人

随少四人とねり二人志より一人雑色四人

随少四人とねり二人志より一人おさく一人

前石かす

いふ

くく人の

きこよめ

くく人の

とねり

あき

あき

あき

あき

あき

あき

あき

あき

あき

あき

あき

あき

侍

あき

あき

あき

とねり二人ぬ木一人雑色四人

とねり二人ゆき一人

随少二人とねり一人ぬ木二人同一人雑色四人

随少二人とねり二人志より一人同一人雑色四人

随少一人とねり一人志より一人同一人雑色四人

随少二人とねり二人雑色四人

くく人二人とねり二人雑色四人随少二人とねり二人ぬ木

二人おさく一人ゆき一人

随少二人とねり二人雑色四人

とねり二人ぬ木一人おさく一人ゆき一人

随少二人とねり二人雑色四人

五ノ車 別當 仰々として修習塔の射を中しはる

三系殿 寺の入りたるはけり

けり見たるはけり

~~~~~

大宮殿 ひんこの入る

~~~~~

~~~~~

六ノ車 今おほれ中細 仰々として修習塔の射を中しはる

小倉屋のりん殿 及はひんこの入る

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

新さい殿 三位入る

~~~~~

~~~~~

七ノ車 今おほれ中細 仰々として修習塔の射を中しはる

こかの殿 故の入りたる

~~~~~

~~~~~

少細殿 三人三位入る

~~~~~




